

台湾の民主化過程における雑誌メディアの役割

——廖為民『我的党外青春』を中心に

東京医科歯科大学 家永真幸

台湾の民主化は、1970年代初頭の中華民国国連議席喪失や米中和解といった対外危機を背景に起動し、制度上は1996年3月の中華民国総統直接選挙をもってひとまずの完成を見た。この間、蔣経国総統死去の直前期にあたる1986年9月、民主進歩党の結党が黙認されている。それ以前にも、中国国民党による統治に批判的な目を向ける人々は広く存在していたが、彼らは野党を結党することができず、いわゆる「党外」勢力として活動を行わねばならなかった。ただし、当時の彼らには多少なりとも、自由に議論を戦わせ、組織だった活動を行うための、一定の空間が与えられていた。その1つの重要な場となったのが、「党外雑誌」と呼ばれた一群の雑誌メディアであった。本報告では、1949年以降の香港・台湾両地域における民主化論・本土化論を通観せんとする本分科会の試みに寄与すべく、1970年代半ばから80年代半ばにかけ、台湾の民主化プロセスの中で党外雑誌が果たした役割について改めて考察したい。

党外雑誌に関しては、すでに台湾に厚い研究の蓄積がある。本報告ではまず、それらの成果に立脚し、当時の各種党外雑誌が展開した議論の概要ならびに、国民党政府当局による取り締まりに関する法的根拠や介入手段について整理する。その上で、本報告では以下の2点に留意しながら、党外雑誌の役割について再検討したい。

第1に、2010年代の台湾ひまわり運動や香港雨傘運動と、1970、80年代の台湾における党外運動とでは、運動をとりまくメディア状況が大きく異なっている。技術の発展により人々の通信手段は大きく変化しており、人の集まり方、集まる場所も様変わりした。そこで本報告では、現代の問題を議論の射程に収めるための前提として、1970、80年代の台湾において「雑誌」というメディアをどのように位置づけるべきかについて、若干の検討を加えたい。

第2に、党外雑誌は政治的主張を持つ人々が執筆者として集う場であったと同時に、広範な読者が集まる場でもあった。しかし、従来の研究は、党外雑誌の議論に表れる政治思想に、主に焦点を当ててきた。これに対し、昨年2015年11月に出版された廖為民『我的党外青春——党外雑誌的故事』（台北：允晨文化実業）は、出版人にして党外雑誌コレクターでもある著者による「党外雑誌」論である。そこで本報告では、同書を主な参考資料としつつ、党外雑誌の「流通」や「読まれ方」についても理解を深めたい。